

北海道薬用作物生産モデル 事例集



平成31年3月

北海道農政部生産振興局農産振興課

目次

1 当別薬用植物栽培研究会（石狩郡当別町）

1 当別町の概況	1
2 ムラサキの栽培	2
(1) 栽培の契機	
(2) ムラサキ	
(3) シコン(紫根)	
(4) 栽培研究会	
(5) 栽培の状況	
3 栽培歴・主な作業内容	7
(1) 播種・育苗・定植	
(2) 除草(中耕)	
(3) 収穫・調製	

4 顧客の開拓・市場の拡大	10
(1) 生薬	
(2) 染物	
(3) 新たな用途・商品	

目次

2 八雲町生薬栽培協議会（二海郡八雲町）

1 八雲町の概況	13
2 トウキの栽培	14
(1) 栽培の契機	
(2) トウキ	
(3) トウキ(当帰)	
(4) 栽培協議会	
(5) 栽培の状況	
3 栽培歴・主な作業内容	19
(1) 播種・育苗・定植	
(2) 防除・除草(中耕)	
(3) 収穫・調製	

4 安定生産体制の確立	22
(1) 寒冷紗を用いた育苗	
(2) 作業機械の改良	
(3) 産地における二次加工	

目次

3 下川町薬用植物栽培研究協議会（上川郡下川町）

1 下川町の概況	25
2 カンゾウの栽培	26
(1) 栽培の契機	
(2) カンゾウ	
(3) カンゾウ(甘草)	
(4) 栽培研究協議会	
(5) 栽培の状況	
3 栽培歴・主な作業内容	31
(1) 播種・育苗・定植	
(2) 防除・除草(中耕)	
(3) 収穫・調製	

4 新技術による大規模生産の体制化	34
(1) 短期栽培技術の確立に向けて	
(2) 化粧品原料としての活用	
(3) 活着率向上による枯死の抑制	

1-1 当別町の概況

当別町は、農業を基幹産業としており、町面積42,286haのうち、耕地面積は8,560haと約20%を占め、豊かな水と石狩平野に位置する恵まれた土地条件を活かし、水稻、小麦、大豆を中心とした農業を展開しています。

また、これらの主要農産物に加え、かぼちゃ、にんじん、アスパラガス、ブロッコリーなどの野菜、ユリやカーネーション、かすみ草など花き生産も盛んです。

基幹産業である農業は、当別町にとって大きな魅力であり、豊富な種類の穀物、野菜類、畜産品、花きの生産を活かした、一次産業のブランド化、二次加工、6次産業化を推進するため、「当別町農業10年ビジョン」を策定し、関係機関が一体となって、新たなブランド創出と付加価値を高める取り組みを進めています。



■当別町の農業(平成28年度)

作物名	面積(ha)	収穫量(t)
水 稻	1, 630	8, 910
小 麦	3, 440	15, 800
大 豆	566	1, 340
かぼちゃ	104	1, 277

※資料:「当別町勢要覧」

1-2 ムラサキの栽培

(1) 栽培の契機

当別町では、「ブランド化・6次化・販路拡大」を掲げて、亜麻をはじめとした新たな農産物の生産や北海道医療大学と連携した農産物の加工品の開発などに取り組んできました。

そうした中で新たな農産物の導入にあたっては、成長性が高いことだけでなく、付加価値の高いことが求められたため、薬用植物の栽培に注目し、平成23年9月に当別新産業活性化センターが事務局を担って、農家を会員とした当別薬用植物栽培研究会を設立しました。

その後、栽培研究会では、我が国の伝統的な創薬である「紫雲膏(しうんこう)」の原料としてだけでなく、古来からの染め物の原料として、絶滅危惧種となっているムラサキに着目し、地域をあげて試験栽培を行ってきました。

ムラサキの試験栽培にあたっては、当別新産業活性化センターと北海道医療大学との間で共同研究契約を締結することで種子の提供を受けながら、産地化を進めています。

1-2 ムラサキの栽培

(2) ムラサキ

ムラサキは、万葉集で十七首に詠まれる日本原産の植物で、その根はシコン(紫根)として古代から野生のものが染め物や生薬に使用されています。

植物名	ムラサキ
ラテン名	<i>Lithospermum erythrorhizon</i> Siebold et Zucc.
和科名	ムラサキ科
分類	多年生草本
栽培年数	1年



※資料:(国研)医薬基盤・健康・栄養研究所
薬用植物資源研究センター
「薬用植物総合情報データベース」
栽培年数は当別町における一般的なものの

1-2 ムラサキの栽培

(3) シコン(紫根)

シコン(紫根)は、ムラサキ *Lithospermum erythrorhizon* Siebold et Zuccarini (Boraginaceae) の根。

生薬名	シコン
生薬英名	Lithospermum Root
生薬ラテン名	LITHOSPERMI RADIX
生薬和名	紫根
基原植物	ムラサキ
部位	根
食薬区分	専ら医薬品
成分(化合物)	Shikonin(シコニン)
用途	消炎、解毒、解熱、皮膚疾患(腫瘍、火傷、凍傷、湿疹、痔疾)



※資料:(国研)医薬基盤・健康・栄養研究所
薬用植物資源研究センター
「薬用植物総合情報データベース」

1-2 ムラサキの栽培

(4) 栽培研究会

当別薬用植物栽培研究会は、薬用植物栽培の情報の交換及び問題点の把握・検討を行い、会員の技術改善のための諸活動に資することで、気候風土や農家経営等に適合した薬用植物栽培を行うことを目的としており、構成員がそれぞれの役割を意識した中で活動を行っています。

名 称	当別町薬用植物栽培研究会
設立時期	平成23年9月
構 成 員 (役 割)	<ul style="list-style-type: none">・栽培農家（薬用植物の栽培・調製）・北石狩農業協同組合（生薬原料の販売）・北海道医療大学（薬用植物と生薬の情報提供と共同研究）・辻野商店（市場開拓と加工）・(一社)当別新産業活性化センター（栽培計画の管理）
事 務 局	(一社)当別新産業活性化センター



1-2 ムラサキの栽培

(5) 栽培の状況

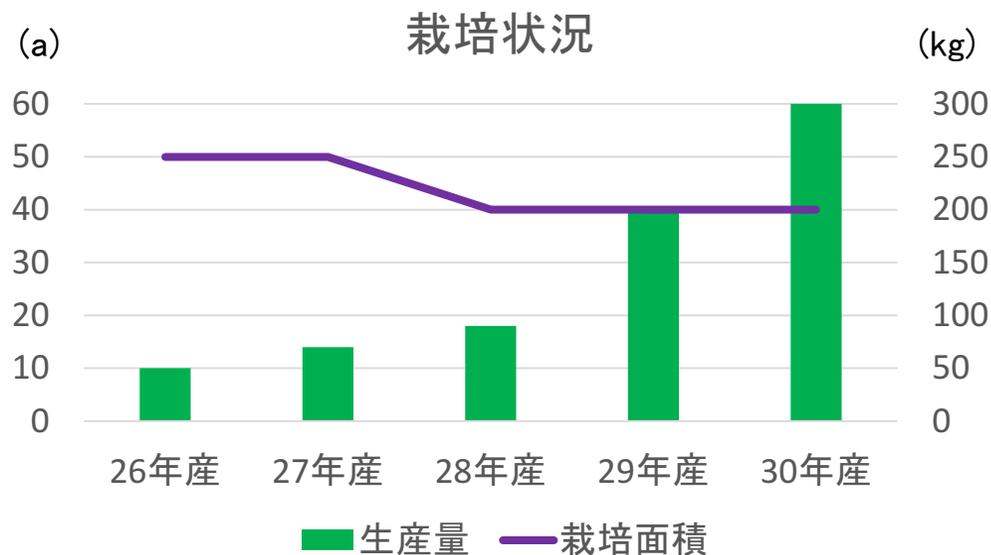
当別町では、若手の栽培農家をはじめとした栽培研究会の構成員がそれぞれの役割を意識した中で活動を行っていますが、連作障害の防止や無農薬栽培の実施する上で、圃場の確保が課題となっています。

当別町におけるムラサキの栽培は、年次による戸数や面積の増減はありますが、生産量の増加が行われてきており、産地化に向けた拡大が図られています。

■栽培状況の推移

(単位: 戸、a、kg)

	26年産	27年産	28年産	29年産	30年産
栽培戸数	6	5	5	5	3
栽培面積	50	50	40	40	40
生産量	50	70	90	200	300



1-3 栽培暦・主な作業内容

(1) 播種・育苗・定植

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
1年目			△	△	◎	◇	◇	◇	◇	□	○	
2年目												

△播種・育苗、◎定植、◇除草(中耕)、□収穫、○調製



育苗



定植

1-3 栽培暦・主な作業内容

(2) 除草(中耕)

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
1年目			△	△	◎	◇	◇	◇	◇	□	○	
2年目												

△育苗、◎定植、◇除草(中耕)、□収穫、○調製



生育期

1-3 栽培暦・主な作業内容

(3) 収穫・調製

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
1年目			△	△	◎	◇	◇	◇	◇	□	○	
2年目												

△育苗、◎定植、◇除草(中耕)、□収穫、○調製



収穫



調製

1-4 顧客の開拓・市場の拡大

(1) 生薬

江戸時代の外科医として著名な華岡青洲がムラサキの根であるシコン(紫根)を成分とした「紫雲膏」を考案し、今日でも火傷や痔などに効用のある軟膏薬として製薬メーカー各社から販売されています。

当別町では、道外メーカーへの情報提供を積極的に行うことで高い評価を得て、中国産から当別産への原料の切替を図ることに努力していますが、今後はメーカー側の需要に見合った生産量を確保するための栽培体制の確立を図ることが必要となっています。



医薬品①



医薬品②

1-4 顧客の開拓・市場の拡大

(2) 染物

ムラサキの根による「紫根染」は古くから行われており、聖徳太子の冠位十二階では、一番「位」の高い人が着る衣は紫色とされています。

当別町では、実際に当別産ムラサキを染料として使用してもらい、染め色の違いの理解を図る取り組みを行っています。また、老舗の染料店などに対しても当別産のシコンの取り扱いを進めています。

ムラサキは国内の栽培地域が一部に限られることから、道外産地と連携した栽培の検討も進めており、他産地からも使用意向や栽培指導・協力への打診を受けるなど、今後も広域的な広がりが期待されています。



染物



老舗染物店

1-4 顧客の開拓・市場の拡大

(3) 新たな用途・商品

当別町では、ムラサキを地域特産品にすることも視野に入れながら、生薬や染料以外の新しい用途・商品の開発も目指しています。

高付加価値が期待される用途・商品として化粧品があり、まず石鹸の商品化を目指して、試作を繰り返しながら「紫根石鹸」を完成させました。町内の「つじの蔵」や「道の駅」などでの販売を開始し、見た目の鮮やかさなどからも購入者に好評を得ています。



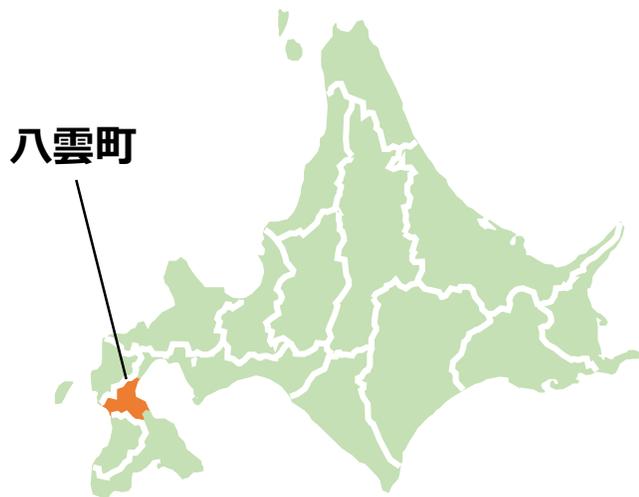
紫根石鹸

2-1 八雲町の概況

八雲町の農業地帯は、大きく八雲地区(太平洋側北部)、落部地区(太平洋側南部)、熊石地区(日本海側)に分けられ、八雲地区は酪農、落部地区は水稻(もち米団地)と軟白ネギ・花きなどの複合経営、熊石地区は野菜を中心に経営されており、経営耕地面積は6,670ha(平成29年度)を有しています。

太平洋側では初夏に霧が多く発生し、日照不足や低温により一般的な畑作には適さず、従来から冷涼な気候でも影響が少ない馬鈴しょ(種いも)、近年、降雪が少ない落部地区では施設園芸作物などが生産されています。

農業生産については、大きく畜産と耕種に分かれており、畜産では乳価の安定や個体販売が堅調で増収傾向にあり、耕種のうち特にこれまで主要作物であった馬鈴しょ(種いも)は、生産過程での防疫管理の困難さや生産者の高齢化に伴い、は大きく減収しています。



■八雲町の農業(平成29年度)

作物名	面積(ha)	収穫量(t)	産出額(千万円)
水 稻	335	1,470	31
馬鈴しょ	73	1,840	18
軟白ねぎ	—	495	29

※資料:「八雲町農業概要」(平成30年7月)

2-2 トウキの栽培

(1) 栽培の契機

八雲町の薬用作物栽培は、町内に北里大学附属牧場が所在することが縁で、平成24年11月に北里大学及び株式会社夕張ツムラから町内の希望農家による栽培の打診があったことに始まります。

その後、町やJAが中心となった説明会などにより広く町内農家等に周知しながら希望者を募り、翌年(平成25年)春からトウキ栽培10戸、ソヨウ栽培2戸による試験栽培を開始しました。初年度は、栽培技術やノウハウなどの情報がない中、各生産者は自らの畑作経験などを基に試行錯誤を繰り返しながら栽培に取り組みました。

それ以降、生産者相互の情報交換や先進地視察などを経ながら、収穫量や生産額は徐々に増え、特に生産技術面においては、山林苗木育苗技術を活かしたトウキ苗の育苗栽培により、高品質かつ高収量を実現する生産者も出ており、育苗栽培の委託者から高い評価を受けています。

今後も、実需者、研究機関、農業者、苗供給・加工業者、関係機関が相互に連携を取りながら産地化を進めていくことが大事なものと思われます。

2-2 トウキの栽培

(2) トウキ

トウキには、奈良県などで栽培されているヤマトウキと、北海道で栽培されているホッカイトウキがあります。
トウキとホッカイトウキでは、根の形状だけでなく茎葉の色なども違いが見られます。

植物名	トウキ
ラテン名	<i>Angelica acutiloba</i> Kitagawa
和科名	セリ科
分類	多年生草本
栽培年数	2年



※資料:(国研)医薬基盤・健康・栄養研究所
薬用植物資源研究センター
「薬用植物総合情報データベース」
栽培年数は八雲町における一般的なものの

2-2 トウキの栽培

(3) トウキ(当帰)

トウキ(当帰)は、トウキ *Angelica acutiloba* Kitagawa又はホツカイトウキ *Angelica acutiloba* Kitagawa var. *sugiyamae* Hikino (Umbelliferae)の根を、通例、湯通ししたもの。

生薬名	トウキ
生薬英名	Japanese Angelica Root
生薬ラテン名	ANGELICAE ACUTILOBAE RADIX
生薬和名	当帰
基原植物	トウキ
部位	根
食薬区分	専ら医薬品
成分(化合物)	Ligstilide (リグシチリド)
用途	補血、強壮、血行障害、鎮痛、鎮静



※資料: (国研) 医薬基盤・健康・栄養研究所
薬用植物資源研究センター
「薬用植物総合情報データベース」

2-2 トウキの栽培

(4) 栽培協議会

八雲町生薬栽培協議会は、生薬栽培上の諸課題解決のため平成28年度に設立され、栽培技術の向上に加え収穫物の流通などを含めた地域戦略の検討を行っています。

名 称	八雲町生薬栽培協議会
設立時期	平成28年9月
構 成 員 (役 割)	<ul style="list-style-type: none">・栽培農家（栽培・管理・収穫）・八雲町生薬生産部会（各種試験の実施）・新函館農業協同組合八雲基幹支店（生産部会の運営・助言）・(株)夕張ツムラ（技術支援・助言）・渡島農業改良普及センター北部支所（技術支援・助言）・道南農業共済組合東部支所（技術支援・助言）・八雲町（運営支援・助言）
事 務 局	新函館農業協同組合八雲基幹支店

2-2 トウキの栽培

(5) 栽培の状況

八雲町生薬栽培協議会では、(株)夕張ツムラが中心となり、生薬原料としてのトウキ栽培と路地でのトウキ苗の育苗を行っており、トウキ苗の栽培にあたっては、寒冷紗の使用により高評価を得ています。

また、作業機械(播種・苗植え)の改良により、これまでの人力重労働作業の軽減化と効率化を図ることが可能となり、計画的な作業工程管理や経費の大幅な削減によって今後の栽培面積拡大にもつながり、より安定的な栽培生産体制を確立することが期待できます。

■栽培状況の推移

(単位:戸、a、kg)

	25年産	26年産	27年産	28年産	29年産
栽培戸数	10	7	9	12	12
栽培面積	87	165	216	402	500
生産量	900	3,160	4,603	8,860	28,360



2-3 栽培暦・主な作業内容

(1) 播種・育苗・定植

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
1年目						△	△	△	△	△	△	△
2年目	△	△	△	△	◎	☆◇	☆◇	☆◇	☆◇	☆◇	□○	○

△播種・育苗、◎定植、☆防除、◇除草(中耕)、□収穫、○調製



育苗



定植

2-3 栽培暦・主な作業内容

(2) 防除・除草(中耕)

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
1年目						△	△	△	△	△	△	△
2年目	△	△	△	△	◎	☆◇	☆◇	☆◇	☆◇	☆◇	□○	○

△播種・育苗、◎定植、☆防除、◇除草(中耕)、□収穫、○調製



生育期



生育調査

2-3 栽培暦・主な作業内容

(3) 収穫・調製

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
1年目						△	△	△	△	△	△	△
2年目	△	△	△	△	◎	☆◇	☆◇	☆◇	☆◇	☆◇	□○	○

△播種・育苗、◎定植、☆防除、◇除草(中耕)、□収穫、○調製



収穫



一次乾燥

2-4 安定生産体制の確立

(1) 寒冷紗を用いた育苗

当地域では、慣行法と寒冷紗を用いた育苗の比較試験を行い、寒冷紗を設置を設置した播種床における安定した生育を確認しました。

発芽率の向上などの優位性が見られたことから、今後も寒冷紗の導入を進めていく計画としています。



播種床寒冷紗による被覆状況

2-4 安定生産体制の確立

(2) 作業機械の改良

これまでは、生産者個々の栽培面積が小さいことや、国内で販売されている薬用作物専用の播種機や苗植機はなく、ほとんどが人力作業であったため、恒常的な労働力不足によりマンパワーの確保が大きな課題となっていました。

こうしたことから、本地域では国庫補助事業等を活用した作業機械の改良により、現在の人力重労働作業の軽減化と効率化を図ることが可能となり、計画的な作業工程管理や経費の大幅な削減が期待できる状況となりました。



自走式定植機



自走式播種機

2-4 安定生産体制の確立

(3) 産地における二次加工

当協議会では、二次乾燥加工作業を試験的に取り組み、冬期間の雇用を確保することができたことで、1名の通年雇用化が図られました。

また、加工により付加価値を高めるとともに、苗の育苗から秋の収穫まで一連の作業を町内で完結できる体制を整え、更なる栽培面積の拡大を図ることで生産者の安定した収入・営農・輪作体系に繋がることを期待しています。



裁断機



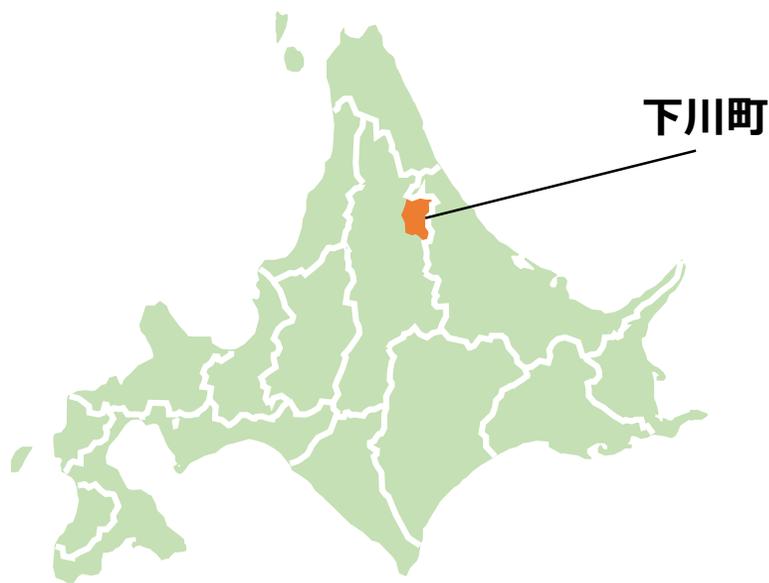
平型乾燥機

3-1 下川町の概況

下川町の農業は、地域の中央部を名寄川が東西に貫流し、気候は大陸の様相を呈し、夏季は比較的高温であるため、その立地条件を生かし稲作と酪農を中心とした農業生産が進められてきました。

稲作は、転作の定着化により畑作へ移行し、全量がもち米であり、近隣市町村とともに北海道有数のもち米産地を形成しています。

畑作は、麦、そばを中心とした作付が行われており、近年では、付加価値の高い農産物生産にシフトし、気候条件に左右されにくい施設園芸作物の導入が進んでいます。また、酪農は下川町の農業生産額の7割を占めており、近年では搾乳ロボットを導入している法人もあり、農業経営の効率化を図っています。



■ 下川町の農業粗生産額

(単位:万円)

年	農業粗生産額	耕種	畜産
27	240,900	80,100	160,800
28	261,100	71,000	190,100
29	269,200	77,200	192,000

※資料:「下川町の概要」(2018年版)

3-2 カンゾウの栽培

(1) 栽培の契機

下川町は産地戦略として、「農商工連携によるブランド化・販売拡大」を目指しており、特に下川町の「そば」は栽培が盛んで「JA北はるかブランド」として全国に販売されていますが、収益性が低く、新たな高収益作物を模索しているところでした。

こうした中で、下川町では王子ホールディングス(株)が町役場との「森林資源の多面化活用に関する包括連携協定」を締結し、薬用作物の国内栽培を目指すため、平成25年9月に町内の一の端地区に医療植物研究室を設立したことが始まりとなります。

研究室設立後、王子ホールディングス(株)では薬用作物の栽培試験を続けた結果、普及に一定の目途が立つまでの状況となったことから、関係機関と農家で構成する「下川町薬用植物栽培研究協議会」を設立し、カンゾウの大規模生産を目指す体制を構築しました。

3-2 カンゾウの栽培

(2) ウラルカンゾウ

カンゾウは、地下部にショ糖のおよそ150倍の甘味を有すると言われているグリチルリチン酸を多く含み、文字どおり「甘い草」。

植物名	ウラルカンゾウ
ラテン名	<i>Glycyrrhiza uralensis</i> Fisher
和科名	マメ科
分類	多年生草本
栽培年数	2年



※資料:(国研)医薬基盤・健康・栄養研究所
薬用植物資源研究センター
「薬用植物総合情報データベース」
栽培年数は下川町における一般的なものの

3-2 カンゾウの栽培

(3) カンゾウ(甘草)

カンゾウ(甘草)は、ウラルカンゾウ *Glycyrrhiza uralensis* 又は *Glycyrrhiza glabra* Linne (Leguminosae) の根及びストロンで、ときには周皮を除いたもの(皮去りカンゾウ)。

生薬名	カンゾウ
生薬英名	Glycyrrhiza
生薬ラテン名	GLYCYRRHIZAE RADIX
生薬和名	甘草
基原植物	ウラルカンゾウ、スペインカンゾウ
部位	根、ストロン
食薬区分	非医
成分 (化合物)	Glycyrrhizin(グリチルリチン)、Licochalcone A(リコカルコンA)、Licochalcone B(リコカルコンB) など
用途	かぜ薬、解熱鎮痛消炎薬、鎮痛鎮けい薬 など



※資料:(国研)医薬基盤・健康・栄養研究所
薬用植物資源研究センター
「薬用植物総合情報データベース」

3-2 カンゾウの栽培

(4) 栽培研究協議会

下川町薬用植物栽培研究協議会は、薬用植物栽培の情報交換や問題点の把握・検討を行い、会員の薬用植物に係る栽培技術の改善・向上を図る活動を展開することで、気候風土や農業経営に適合した薬用植物の栽培を普及することを目的として設立されました。

名 称	下川町薬用植物栽培研究協議会
設立時期	平成29年9月
構 成 員 (役 割)	<ul style="list-style-type: none">・栽培農家（試験ほ場の提供・栽培管理）・王子ホールディングス(株)（試験栽培計画の作成・実行）・上川農業改良普及センター上川北部支所（技術支援・助言）・下川町（運営支援・助言）
事 務 局	下川町



3-2 カンゾウの栽培

(5) 栽培の状況

下川町薬用植物栽培研究協議会では、近隣に製紙工場を有する王子ホールディングス(株)の工場インフラを活用した産地形成を目指しています。

現段階では、王子ホールディングス(株)と栽培農家によってカンゾウの大規模栽培を目指した技術の確立と安定した種苗供給に向けた試験栽培を実施しており、今後も継続した試験を実施しながら栽培面積を拡大していく見込みです。

■栽培状況の推移

(単位:戸、a、kg) (a)

	25年産	26年産	27年産	28年産	29年産
栽培戸数	1	4	4	4	5
栽培面積	7	15	60	50	500
生産量	—	—	100	400	400



3-3 栽培暦・主な作業内容

(1) 播種・育苗・定植

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
0年目						△	△◎	◎	◇			
1年目					◇	◇	☆◇	☆◇	☆◇			
2年目					◇	◇	☆◇	☆◇	□	□○	○	○

△播種・育苗、◎定植、☆防除、◇除草(中耕)、□収穫、○調製



育苗



定植

3-3 栽培暦・主な作業内容

(2) 防除・除草(中耕)

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
0年目						△	△◎	◎	◇			
1年目					◇	◇	☆◇	☆◇	☆◇			
2年目					◇	◇	◇	☆◇	□	□○	○	○

△播種・育苗、◎定植、☆防除、◇除草(中耕)、□収穫、○調製



防除



除草

3-3 栽培暦・主な作業内容

(3) 収穫・調製

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
0年目						△	△◎	◎	◇			
1年目					◇	◇	☆◇	☆◇	☆◇			
2年目					◇	◇	◇	☆◇	□	□○	○	○

△播種・育苗、◎定植、☆防除、◇除草(中耕)、□収穫、○調製



収穫



調製

3-4 新技術による大規模生産の体制化

(1) 短期栽培技術の確立に向けて

協議会の構成員である王子ホールディングス(株)が、日本薬局方に定める薬効成分含有量(グリチルリチン酸含有2.0%以上)を満たす短期栽培技術を開発したことから、この技術を活用したカンゾウの播種から収穫までを2年に短縮した栽培体系の確立を目指しています。並行して、生産拡大に向けた大規模栽培化の検討を進めています。

領域をこえ 未来へ



薬用植物「甘草(カンゾウ)」の国内短期栽培技術確立のお知らせ

プレスリリース
2016年11月17日

王子ホールディングス株式会社は、このほど、薬用植物「甘草(カンゾウ)」の栽培研究によって、第17改正日本薬局方に定める薬効成分含量(グリチルリチン酸含量2.0%以上)を満たす短期(種子を播いて収穫まで2年)栽培技術を、日本で初めて開発いたしましたのでお知らせします。



3-4 新技術による大規模生産の体制化

(2) 化粧品原料としての活用

協議会の構成員である王子ホールディングス(株)は、高級化粧品の製造販売を行う株式会社アルビオンとの共同により、国内栽培のカンゾウから抽出精製されたグリチルリチン酸ジカリウム(主成分)の化粧品原料開発を行い、その実用化の見通しがたち商品化が進められています。

領域をこえ 未来へ



当社製国産「甘草(カンゾウ)」の、高級化粧品への実用化について

プレスリリース
2017年4月25日

当社は、薬用植物の国内栽培技術確立に取り組んでおりますが、このほど当社栽培の「甘草(カンゾウ)」が、株式会社アルビオン(本社:東京中央区、社長小林章一氏。以下アルビオン社)の化粧品原料として実用化される見通しがつきましたので、お知らせいたします。



3-4 新技術による大規模生産の体制化

(3) 活着率向上による枯死の抑制

カンゾウの栽培においては、移植後の活着率向上による枯死の抑制を図ることが、生産体制を確立する上で課題となっています。

欠株による低い生産性のため経済性が劣ることが、本地域による作付振興の障害となっており、大規模生産を目指す上で、協議会では試験研究機関等の協力も得ながら課題解決に向けた試験栽培を行っています。



現地試験